

## グノーシス思想とインド——資料(1)

定方 晟

Gnosticism and India  
Historical Materials (1)

Akira SADAKATA

### Abstract

The origin of gnosticism is variously discussed. Among possible influences on it the strongest candidates are, according to Mr. Arai, Platonism and Judaism. I think that Indian influence should be included though its force is limited. This problem is so difficult to solve that I start my study by collecting historical materials relevant to it.

### 0 はじめに

西暦の最初の3世紀間にローマ帝国の思想界を賑せたグノーシス主義の起源がさまざまに論じられている。プラトン思想、ユダヤ思想、東方（エジプト、小アジア、メソポタミア、イラン、インド）の思想が考慮の対象にあげられた。私はインド学者としてグノーシス主義とインドの関係を見てみたい。

まず荒井献氏の論文「グノーシス主義の本質と起源について」（荒井献著作集6『グノーシス主義』、岩波書店、2001年、所収）によって、この問題の概要を見てみよう。氏の論文は三節からなる。

第一節「研究史の検討——方法論的観点から」では、キリスト教グノーシス主義の起源をギリシアに求める見解、イランに求める見解、ユダヤに求める見解があるという。これらの見解はそれぞれ複数の資料を整理することによって導き出されたものだという。

これに対し、単一の資料に起源を求める見解がある。『トマス行伝』所収の「真珠の歌」に起源を求めるヴィデングレンの見解や、魔術師シモンの教説に起源を求めるシェップスとシュミットハルスの見解がある。

つぎに心理学的アプローチと社会学的アプローチがある。前者を説明するためにクイスペルの「自己経験の神話的投影」という言葉があげられる。後者を説明するために、ヘレニズム時代における民族の固有性の喪失、ローマ支配下における官僚制の徹底、70年のエルサレム陥落、等の諸事件に遭遇した民衆が新たな救済を模索せざるを得なくなったというクイスペルやグラントの見解が紹介される。

つぎに実存論的アプローチがある。ヨナスはいう。グノーシス主義は単なる宗教的混交現象ではなく、古代末期に固有な「反宇宙的」「現存在の姿勢と、それに担われた根源的存在の説明」である、と。また、ビアンキはいう。グノーシス主義は、いつ、どこでも、お互いに史的な関係なしに自己を主張できる反宇宙的・二元的 Geisteshaltung [精神的態度] に基づく宗教思想運動であり、その意味でこれは、他の宗教思想から動機史的に導入できない、特定の実存理解である、と。

荒井氏はさらに、最近発見されたナグ・ハマディ文書の研究によって新たな展望が開かれ得ることにも言及する。

第二節と第三節で、荒井氏は自らの見解を示す。第二節「グノーシス主義の本質」でグノーシス主義の本質を形成する三つのモチーフをあげる。(1)究極的存在と人間の本来的自己がその本質において一つであるという認識<sup>グノーシス</sup>に救済を見出す。(2)人間が現在おちいつている非本来的自己という状態は宇宙の創造者の創造の結果であり、創造者は否定さるべき存在である。(3)この人間を救済するために救済者が要請される(キリスト教グノーシスにおいては当然のことながらキリストがこの救済者である)。

第三節「グノーシス主義の起源」で荒井氏は上記の三つのモチーフのそれぞれの起源を明かす。(1)の起源はプラトニズムにあり、(2)と(3)の起源はユダヤ教にある。

以上が荒井氏の所論の要旨である。私は氏がインドを無視ないし軽視していることに不満をいだく。氏の所論の中にインドという言葉が二ヶ所に現れる。一つは、氏が引用したヴィデングレンの言葉「(グノーシス主義は) 全くのところ、イラン人によって小アジアに仲介された、一つのインドーイラン運動である」(荒井, p. 6) である。もう一つは、「お互いに史的な関係がなくても自己を主張できる」ものとしての実存理解が存在する国としてあげられる「ウパニシャッドのインド」である(荒井, p. 11)。しかし、氏自身はこれらの「インド」はキリスト教グノーシスにとって何の重要性も持たないと考えるらしく、自らの見解を何も示さない。

これがグノーシス研究者の標準的な見解らしい。古くスコットも『宗教道徳百科事典』(ERE) でグノーシスの起源に対するインドの影響について否定的な見解を示した。かれはグノーシス主義の誕生に関与した可能性のある思想として、バビロニアの星辰神の思想、ゾロアスター教の二元論、ミトラス教の靈魂の昇天および聖別式、エジプトのヘルメス文学、プレローマ(Pleroma)理論、流出によって起こる諸イオンの誕生、男神と女神の対の思想、人間の神化、フリュギアの神秘と恍惚を特徴とする信仰、キュベレとアッティス、母と犠牲者=救済者、などをあげたあと、最後にインドに触れて、つぎのようにいつている。

後期のグノーシス主義において初めてインド由来の影響の跡が見られ始める。ヒッポリュトス(c. 160-235)が記述するバシリデス(-140 BC)の思想体系は仏教思想との著しい類似を

提供する。すなわち、バシリデスの神についての否定的な考えや、最終的な死 (final summation) に伴うであろう大いなる不知 (Great Ignorance [Nirvāṇa]) の教義などがそれである。バシリデスの息子のイシドロスが主張するような寄生的靈魂 (Parasitic Soul) の理論も仏教のよく知られた考えを連想させる。そして、「最後のグノーシス主義者」であるバレデサネス (154-223?) は自らインドの思想に通じていること、その影響を受けたことを明かしている。しかし、後期のグノーシス主義に対してインドの影響は誇張されすぎる傾向がある。盛期のグノーシス主義に対してはインドの影響はほとんどないか、全くない。(ERE, s. v. Gnosticism, p. 233a-234a, article by E. F. Scott)

拙論の目的はインドがキリスト教グノーシスに影響を与えた可能性を探ることである。グノーシスの専門家でない私がおこなう探究にはもちろん限界がある。私が意図するのはあくまでも可能性の探究であって、本論はそのための資料集収である。インドに無関係かも知れない資料も念のため集める。つぎに簡単な凡例を示す。

- (a) 1, 2等はテーマの番号。▲印はサブテーマを示す。
- (b) 《 》中は著者名。つづく ( ) は生存年代。
- (c) 一つのテーマに関して複数の資料がある場合、資料に(1), (2)等の番号を付す。
- (d) ※印は私の解説ないし注釈。
- (e) [André 数字] は次の書物とそのページを示す。

Jacques André - Jean Filliozat: L'Inde vue de Rome, Textes latins de l'Antiquité relatifs à l'Inde, Paris, Les Belles Lettres, 1986.

## 1 インド人の死生観

※ギリシア人やローマ人に強い印象を与えたインドの宗教家の行動に焼身自殺がある。まずアレクサンドロス大王時代のカラノスのそれがある。

### (1) 《アリアノス》(c. 95-175) (カラノスがペルシスにおいて焼身自殺する)

現地 [インド] の哲学者のなかにカラノスという者がいて、この男が [アレクサンドロス大王の] 説得の結果 [大王の西方帰還に] 同行することになった。メガステネスの記すところではこのカラノスは、わけても自制心を欠くとされており、仲間の哲学者たちも彼が、自分らと一緒にいることの幸福を見捨て、神ならぬ別の主人に仕えることにしたとして、カラノスを誹ったという。

以上のことを私がここに書きとめたのは、アレクサンドロスの事績を記録する上で、カラノスのことについても語ることが、どうしても必要だったからだ。ところでそのカラノスはそれまでは、一度も病気などしたことがなかったのに、ペルシスの地に入ると身体がしだいに衰弱していった。それでも彼には病人としての養生をする気などさらになく、かえってこの状態では自分としては、従来つづけてきた生活の仕方を、どうしても変えなくてはならないような、何らかの病苦に見舞われないうちに、この生を終えるのが望ましいことなのだと、アレクサン

ドロスに語ったという。アレクサンドロスは長い時間かけて彼の考えに反論したが、相手が聴き入れそうもなく、反対にこの点で相手の言ったことを認めてやらなければ、何かまた別の手段で生を絶つかもかもしれないと見てとったので、カラノス自身が指示するままに、彼のための火葬堆を積み上げてやるよう、〔部下に〕命じた。その任務を託されたのは、ラゴスの子で側近護衛官のプトレマイオスだった。一説に伝えるところでは、アレクサンドロスは騎兵と歩兵にあるいは武装をさせ、あるいは火葬堆のためのさまざまな薫香をたずさえさせて、その〔火葬の〕現場に盛大な分列行進の式を挙行したという。またこれも一説によると、参列者は金製や銀製の杯、また王侯が着用する装束を捧げて行進したともいう。カラノス自身は病気のために歩行ができなかったので、彼のために乗馬が用意されたが、彼はその馬にさえ乗れる状態になかったため、吊り台に移され、インド人の風習にしたがって花冠で飾られて、インド語で歌を口ずさみながら運ばれた。インド人たちによればその歌は、神々にささげる賛歌や祝ぎ歌だったということだ。カラノスが乗って行くことになっていた馬は、ネサイオイ人の〔牧で育った〕王家所有の馬だったといわれるが、彼は火葬堆へ上るに先立ち、その馬をリュシマコスに贈った。リュシマコスは叡智の教えを求めて、彼に随侍してきたうちのひとりだったのである。杯や敷き物類のうちアレクサンドロスが彼を莊嚴するために、火葬堆に加えるよう命じておいた品々も、カラノスは他の弟子たちにそれぞれ、〔形見として〕頒ちあたえたのであった。かくてカラノスは火葬堆に上ると、全軍注目の中で作法どおりに身を横たえた。アレクサンドロスとしては自分の友人が見せ物として衆目に曝されるのは、何とも不都合なことではあったが、他の者たちはカラノスが炎の中にその身を置きながら、微動だにしないのを目のあたりにして、驚異の念に打たれたのだった。あらかじめ命ぜられていた者たちの手で火葬堆に火が点じられると、これはネアルコスが伝えるところだが、前もってアレクサンドロスが指示しておいたとおりにラッパが吹き鳴らされ、並いる軍勢は合戦にのぞんで挙げる、あの鬨の声にも似た雄叫びをいっせいに挙げた。戦象の群れもまたカラノスをたたえて、鋭い戦闘の咆哮を高らかにひびかせたのだった。インド人カラノスについてはこうしたこと、またこれに類したことが、信頼すべき人びとによっていろいろと書きとめられているが、それらの話は広く人間に、わけてもおよそ何事かを成さんものと志す人の決意というものが、いかに強固でいかに抜きがたいものであるか、知りたいと願う人にとっては、必ずしも無用ではないのである。

(Arrianos, *Anabasis Alexandrou*, 7. 2~3 [日本語訳は大牟田章訳註『フラウイオス・アッリアノス「アレクサンドロス東征記およびインド誌」』本文編, 東海大学出版会, 1996, pp. 795-799 による] [ ]は大牟田の, [ ]は定方の補。)

(2) 《キケロ》(106-43 BC)

カウカサス山麓で生まれた無学で野蛮な (indoctus ac barbarus) インド人カラヌスは自ら望んで生きながら己れの身を焼いた。

(Cicero, *Tusculanae disputationes*, 2,52 (45-44 BC) [André 25])

(3) 《ストラボン》(64BC-21以後) (無名のインド人がアテネにおいて焼身自殺する)

この著述家（ダマスコのニコラオス）のいうところによれば、かれ（ニコラオス）はアンティオキアのダフネーの森の近くで、アウグストゥス・カエサルのもとへ派遣されたインドの使節たちに会った。かれは自分が見たのは3人だけだったと言っているが、信書からは使節の数ははじめはもっと多かったように思われる。3人以外のものはおもに長旅のために死んだのである。信書は羊皮紙にギリシャ語で書かれていた。書いたのはポーロスという王であり、その内容は、かれが600の王に君臨する君主であるにもかかわらず、カエサルの友人であることを高く誇りとしていること、カエサルがかれの領土のどこを通過したいと思ってもそれを許すこと、カエサルのどんな善意の企てにも助力を惜しまないこと、などであった。持参した贈物を8人の裸の従者が献上した（献上することになっていた？）。かれらは腰に帯をしめ、軟膏の香りをかおらせていた。贈物というのは、肩から先の腕のない1人の生れながらのヘルメス——これは私も見たが——と、何匹かの大きな蛇と、10ペキウスもの長さがある1匹の蛇と、3ペキウスの長さがある1匹の河亀と、はげたかよりも大きい1匹の鷓鴣、であった。アテネで焼身自殺した男は、かれらと一緒に来た男だったといわれる。焼身自殺は、不幸の状態にある人が、そこから自分を解放するためにおこなうものである。しかし、繁栄の状態にある人がおこなう場合もあり、アテネの男の場合はこれである。かれにとっては万事がうまく運んでいたにもかかわらず、かれは考えたのである、世の中にこれ以上ながく留まって、なにか不測の災難に見舞われないように、世を去ることが必要である、と。そこで、かれは、裸のからだに香油を塗り、腰に帯をまいて、微笑とともに薪のうえに身を躍らせたのである。

かれの墓にはつぎの文字が刻まれた。「ザルマノケガス (Zarmanochegas), バルゴサ (Bargosa) 出身のインド人, 自国の習慣にしたがって自らを不死となし, ここに眠る」

(Strabōn, *Geographia*, Book XV. 73)

※「腕のないヘルメス」とは道標として用いられたヘルメス神の胸像をいうのであろう。

#### (4) 《ヨセフス》(37-c. 100)

※上述のような焼身自殺は西方の人に強い印象を残した。そのことを示すものにヨセフスの文がある。かれは1世紀のユダヤ祭司貴族の家の出で、66年ユダヤ・ローマ戦争勃発と同時にガリラヤの総督に任ぜられた。かれによると、ユダヤの指導者エレアザルはローマ軍の攻撃を迎えるにあたり、同胞に向かってつぎのように死の覚悟を説いた。

実際、神から親しく訓練を受けて来たわれわれは、他国人に対して死への覚悟の模範を示すべきである。とはいえ、このこと（死）に関しわれわれが異国からの確証を必要とするなら、哲学の実践を説くかのインド人たちを見ることにしよう。かれら勇気に富むものたちは生ある期間をなにか自然への義務でもあるかのようにしぶしぶと耐え忍び、魂を肉体から解放することのためなら喜んで駆けつける。災害がかれらにこの世の舞台から立ち去ることを強要するわけでもなければ、追い立てるわけでもないのに、かれらは、不死の状態への切望によって、その仲間たちに向かって「じゃあ、これから出かけるよ」と告げるのである。かれらを引き留めようとするものはいない。それどころか、みんながかれらを祝福し、めいめいかれらに自分のいとしい死者たちへのことづてを依頼する。魂がたがいに交渉しあうというかれらの信仰はそ

れほど確かであり、絶対的な真剣さを伴っている。かれらはみんなからことづてを聞き終えると、自分のからだを火にゆだね——というのは、魂はそうすることにより最も浄化された状態で肉体を離れることができるからであるが——賞賛の歌に包まれて死んで行く。実際、かれらが死に赴くときにかれらの最も親しいものたちがかれらをいそいそと送るありさまは、他国の人が仲間の市民が長い旅立ちにでかけるのを送るときの様子となんら違いがない。かれらが泣くのは自分自身のためであり、死出の旅に立つ者に対しては、これを不死の位を受けようとする幸せ者とみなす。さあ、われわれはわれわれの心根がインド人のより劣っていることを恥じずにいられるだろうか。全人類の羨望のままとであるわが国の法律の名誉をこんな気弱さで汚すことを恥じずにいられるだろうか。

(Flavius Josephus, Loeb Classical Library, pp. 603-605)

(5) 《アンブロシウス》(c. 336-397)

死を平然と見ることについては、哲学者の書物やインドの裸の哲学者たちを探し回る必要はない。アレクサンドロスがカラノスに自分についてくるように要求したとき、カラノスが答えた言葉がとりわけ称賛的になって伝わっている。かれはいった。

「あなたが私にギリシアへ同行するように要求し、私が自分の意に反してそれに従ったとしたら、私はどんな称賛を受けるといえるのか。」かれの言葉はまことに威厳に満ちている。しかし、それにもまして、かれの精神は自由尊重の意気に満ち満ちている。かれは大王につきのように書いている。

「カラノスよりアレクサンドロスへ。あなたの友人達はあなたにインドの哲学者への暴力や抑圧を勧めている。かれらはわれらの著作を夢にすら見たことがない。あなたはわれわれの身体を一つの場所から他の場所へ移すことはできるだろう。しかし、われわれの魂にその意に反することをさせることはできない。そんなことは石や木に口を聞かせること以上に不可能である。燃え盛る火は生きている身体に激しい苦痛を与え、破壊をもたらす。だが、われわれはその火の上に登って生きてまま焼かれることもできる。しかし、われわれが意志しないことは、たとえ王であっても貴顕であっても、それをわれわれにさせることはできない。われわれはギリシアの哲学者には似ていない。かれらは言葉には関心をもつが、行いにはもたない。かれらが目的とするのは自分の名声を広げることだけである。それに対し、われわれは行いを言葉に合致させ、言葉を行いに合致させる。われわれにあっては行為は速く、言葉は短い。われわれにとっては自由こそ祝福されたものであり、徳と見なされるものである。」

(Ambrosius, *Epist.* 37, 34-35[André 211])

※これらの文から窺われるように、西方の人たちがインド人から感銘を受けたのは、インド人が生に執着せず、死を恐れないということである。インド人は「生ある期間をなにか自然への義務でもあるかのようにしぶしぶと耐え忍んで」いるようにかれらには見えたのである。インド人のこの死生観の背後には輪廻の思想があろう。輪廻とは生と死を無限に繰り返すことを意味するが、ある人々にとっては望ましく見えるこのことが、インド人にはおぞましく感じられたのである。

インド人がそう考えたのは、かれらの生が貧しいからにすぎないと考える人がいるかも知れない。しかしそれは浅い見方である。生がたとえ快適なものであっても、それを繰り返すことの無意味さはいかに耐えがたいかということは、王子として快適な生活を経験したブッダが最もよく理解していた。むしろ、快適な生活を経験したことのない人が、その空しさを知らずに、生に期待を抱きつづけるのである。現世に対するこの嫌悪感はグノーシスの「反宇宙的」な考えに通じる。

## 2 西方の人のインド旅行

※西方の思想家の中にはインドに関心をもった者がおり、実際にインドに赴いた人もいた。

### ▲ゾロアスター（一説に7世紀BC，一説に12世紀BC）

《アンミアヌス・マルケリヌス》(c. 330-c. 400)

ゾロアスターはインドへ行ってブラフマンの教え（星辰の運動の法則や宗教儀式）を学んだという。(要約)

(Ammianus Marcellinus, *Res Gestae*, 23, 6, 33. [André 225])

※アンミアヌス・マルケリヌスは皇帝ユリアヌスに従ってガリアおよび東方に転戦した。

### ▲ピュタゴラス (c. 582-497)

《アプレイウス》(150頃)

最も広まっている噂はかれ（ピュタゴラス）が進んでエジプトへ勉強しに行ったということ、そこの僧侶たちから宗教的儀式に関する信じがたい力や、数の素晴らしい働きや、幾何学の巧妙な公式などを学んだということである。かれはこれらの知識だけでは満足せず、カルデア人のもとへ行き、そこからさらにブラクマン（Bracmanos）——これはインド人の1階級を構成する賢者のことである——たちのもとに行ったということ、かれらの中の裸の哲学者たちのもとへ行ったということである。

カルデア人は星の学問や惑星の（*numinum vagantium*）定まった運行や、両者（恒星と惑星）が人間の出生に与える種々の影響をかれに教えた。また、人々が多大の資材を投じて地や天や海から抽出する薬などを示した。

ブラクマンたちは哲学の精髓をかれに授けた。なにが精神の修練か、なにが肉体の鍛練か、魂には部分はいくつあるか、生命には局相はいくつあるか、神霊はそれぞれの功德に応じてどんな責め苦、どんな褒賞を受けるかということを示した。

(Apuleius, *Florida*, 15, 11-13 [André 135])

### ▲プラトン (427-347)

定方 晟

(1) 《アプレイウス》(150頃)

かれ(プラトン)はイタリアに戻り、二人のピュタゴラス教徒、タレンティウムのエウリュトゥスと老アルキュタスとについて学んだ。かれは、もし戦争に妨げられなかったなら、インド人やマゴスたちに対しても心を動かしたに違いない。

(Apuleius, *De dogmate Platonis*, 186 [André 135])

(2) 《クラウディアヌス・マメルトゥス》(474 AD 死)

疲れを知らぬ探究者プラトンはエジプトまで行かなかったか、インドのブラフマンのもとまで、ピュタゴラス派の教義の継承者たちの中まで行かなかったか。

(Claudianus Mamertus, *Epist.* 2[André 285])

▲リュシマコス(4世紀BC)

《アリアノス》(c. 360-281BC)

リュシマコスは叡知を求めて、彼(アレクサンドロス)に随従しインドへ赴いた者の一人であった。

※前出, 1, インド人の死生観, (1)《アリアノス》参照。

▲ピュロン(360-c. 270 BC)

《ディオゲネス・ラエルティオス》(3世紀前半)

それから[ピュロンは]アナクサルコスの弟子になり、かれの伴をしてどこへでも出かけて行ったので、インドでは裸の行者たち(ギムノソピスタイ)と、(ペルシアでは)マゴス僧たちと交わりを結んだ。彼はこの経験から、アブデラ(トラキア海岸の古代ギリシア都市)のアスカニオスが述べているように、ものごとの真理は把握できないということ(アカタレープシアー)と、判断の保留(エポケー)という形の議論を哲学のなかに導入して、まことに気位の高いやり方で哲学活動を行ったように思われる。というのも彼は、何ものも美しくもなければ醜くもない、正しくもなければ不正でもないと主張していたからである。同様に、いかなる事柄も真実にそうであることは決してないのであって、人びとはただ法と習慣に従って行動しているにすぎない、なぜなら、それぞれの事柄は、あれであるよりもむしろこれであるということはないからだ、というのであった。

……

彼は、(アンティゴノスによると,)世間を離れて独りで暮らしていたので、家人も彼の姿を稀に見るだけであった。彼がそのように振舞ったのは、あるインド人が(師の)アナクサルコスを非難して、自ら王宮で宮仕えしているようでは、他の人に立派な人間になるよう教えることなどできはしないといったのを、耳にしたからであった。

(Diogenes Laertios, *Vitae Philosophorum*, 9. 61; 9. 63 [加来彰俊訳『ギリシア哲学者列



伝』(下, 岩波文庫, pp. 151-153])

### ▲アポロニオス (1世紀)

#### (1) 《フィロストラトス》(c. 170-245)

※アポロニオスの伝記はセヴェルス帝の妃ユリア・ドムナ (217死) の求めに応じてフィロストラトス (172生) が編集したものである。長篇なので、インド旅行の部分を抄約する。

アポロニオスはテュアナの生まれで、ピュタゴラス派に属する哲学者であり、沈黙の行を実践し、肉と酒を断ち、輪廻を信じ、たとえ神のためであろうと生物を殺してはならないと説いた。かれは早くから魔術師という評判をえて名を知られていたが、さらに知恵を深めるためにインドへ旅だった。ニネヴェでダミスというアッシリア人の従者をえて、バビロンに進み、そこでパルティア王バルダネス (Vardanes) の知己を得、またマギから魔術を学ぶ機会に接した。

コーカサス山のふもとを越え、コーヘン川 (カーブル川) やインダス川を過ぎて、タクシラに到着した。タクシラの王プラオテスはアポロニオスを歓迎し、植物食をとりながらかれとギリシャ語で哲学を論じた。アポロニオスは王から紹介された王の師バラモン・イアルカスの居城に向って東へ進んだ。そこには大勢の賢者たちがいた。アポロニオスはイアルカスに自己や魂や宇宙について質問した。

「自己を知っていますか」

「われわれは何でも知っている。なぜならわれわれは自己を知っているからである。われわれのあいだでは、自己を知らずして哲学することは許されない」

「自己を何と考えますか」

「神と考える」

「なぜですか」

「われわれは善良な人間だからだ」

魂についてはイアルカスはピュタゴラスやエジプト人と同じように輪廻を信じていると答えた。宇宙については、宇宙が五つの要素 (水, 空気, 土, 火, エーテル) からなること、宇宙は生き物であって男であり女であり、自らと交わることにより、生き物を生む、と答えた。

アポロニオスは満足して帰途についたが、エリュトラ海に達したとき、イアルカスに手紙を書いた。「わたしは陸路によってあなたのところへ参りました。いま海路によって帰ります。しかし、あなたがお授け下さった知識によってわたしは天路によって旅することになりました」

(Philostratus, *The Life of Apollonius of Tyana*, I.4-III.51 [Loeb. C. L. Philostratus I, pp.10-357])

#### (2) 《ヒエロニムス》(340-419)

定方 晟

アポロニウスは——世間がいうようにマゴスなのか、ピュタゴラス教徒がいうように哲学者なのかわからないが——ペルシア人の国に入り、コーカサス、アルバノスの国、スキュタイの国、マッサゲタイの国を通過し、インドの最も豊かな土地に入った。そして遂に大河ピソン（ガンジス河）を渡り、ブラグマン（Bragmanas）のもとに達し、ヒアルカス（Hiarcas）の教えを聞いた。ヒアルカスは金の椅子に坐り、タンタロスの泉の水を飲みながら少数のその弟子たちに星々の性質や、動きや、経路を教えていた。

(Hieronymus, *Epist.*, 53, 1 (394-396 AD) [André 239])

(3) 《シドニウス・アポリナリス》(470頃)

※シドニウスは自分の友人に自分がラテン語訳したアポロニオス伝を読むことを勧める。

君は君が得たがっていた物語の知識をいまやいつでもたやすく得ることができるだろう。君は自由にそれが読める状態になったのだから、もし君がわれわれのテュアナ人と連れ立ってカウカサスへ、インダス河へ、エチオピアの裸の哲学者やインドのブラクマンのもとへいわば旅してみる気になればだが。

(Sidonius Apollinaris, *Epist.*, 8,3,4[André 285])

(4) 《グーサン》, 現代

アポロニオス伝に、王がインダス河に複数の黒い馬や牛を犠牲に捧げ、金の柵を投げ込んだという記事があるが、これはアシュヴァメーダ祭に関する記事である。

(Roger Goossens: *Un texte Grec relatif à l'Áśvamedha*, JA, Oct. Dec. 1930, pp. 280-285.)

(5) 《メール》, 現代

この伝記に記された儀式は恐らくヴェーダの宗教のものである。荒唐無稽に見える奇跡の描写もヨーガ行者に関する可能性がある。

(P. Meile, *Communication*, JA, 1943-1945, p. 451.)

### 3 アショーカ王の使節派遣とユダヤの僧院制度

#### ▲アショーカ王の使節派遣

《デュポン・ソメール》(1900-1983)

※以下はデュポン・ソメールの論文を定方が解説し、要約したものである。

フランスのセム語学者デュポン・ソメールはアフガニスタンのラグマーンの岩塊に刻まれたアショーカ王のアラム語法勅を解読し、そこに「タドモル (Tadmor)」(シリアの隊商都市パルミュラの別名) を認めた。この岩塊は古代の大幹線道路を見降ろす位置にあった。

かれはこのことからインド世界と西方世界のあいだに密接な交渉があったことを推測した。実際、アショーカはギリシャの王たち、すなわちアンティオコス、プトレマイオス、アンティ

ゴノス、マガス、アレクサンドロス（エペイロスのアレクサンドロス、在位272-240BC）に法の使節を送っている（アショーカ法勅、第13章）。

仏法に帰依したアショーカの夢は、全人類を仏教的な精神世界に導き入れることであった。「すべての人間がわが子である。朕はわが子に対するのと同じようにすべての人間がこの世とかの世において幸せを得ることを願う。これが朕がすべての人間のためにいただく願いである」（アショーカ法勅、カリंगा版、第1章）

もしアショーカの使者たちが東地中海世界、なかんづくそのヘレニズム文化の二大中心都市であるアンティオキアとアレクサンドリアとに到達したとすれば、この使者たちはその地のひとびとに仏教教団について何事か語らずにはいなかったであろう。なにしろアショーカ自身、仏教教団には多大な関心を抱いていたからである（カルカット・バイラト法勅）。

使者が到達したのは前3世紀である。この直後の前2世紀に、ユダヤ世界に強力な僧院制度が出現する。それは仏教教団と同じように独身、清貧、抑制を理想とするものであった。私（デュポン・ソメール）はパレスチナのエッセネ派とアレクサンドリアのテラペウス派のことをいっているのである。ユダヤ人の神秘的共同体の起源については古くから論じられてきた。古代ユダヤ教の伝統のなかにはまったくその先例も類似物もなく、ユダヤ教以外の周辺の宗教団体の中にもなく、ヘレニズム世界にあればほど広まったティアソイ（Thiasos, オルペウス同胞団）の中にもない。ある学者たちはインドに先例があるのではないかと考えた。インドでは僧院制度は西暦前5世紀から栄えていたからである。そうだ、間違いなく、各地に散在するユダヤ人に僧院のアイデアを吹き込んだのはアショーカの使節なのだ。精神的、神秘的な生活の最も高度な形式に関心を寄せていたユダヤ人たちのあるものがインドの僧院制度に惹かれたのではないか。なるほど僧院制度の萌芽は古いセム族の宗教やヘレニズムの神秘主義のなかにもあったかも知れない。しかし、その大規模な動きが始まるのはアショーカ時代のインドにおいてであったと思われる。この僧院制度はユダヤ世界では2世紀と3世紀にだけ輝きを発して終わったが、のちにキリスト教のなか姿を現してふたたび輝き出し、持続し、いまに至るまでも輝きつづけている。

(Dupont-Sommer, *Une nouvelle Inscription Araméenne d'Asoka trouvée dans la Vallée du Laghman (Afghanistan)*, CRAI, 1970.)

※のちにドイツのフムバッハが同じ法勅を研究して、そこにタドモルという文字はないと主張した。おそらくフムバッハの主張が正しいのであろう。しかし、アショーカが大幹線道路を通じて法の宣伝をおこなったであろうというデュポン・ソメールの想定はそれによって覆ることはない。

アショーカの時代、仏教にはすでに多くの部派が存在し、部派は各自の僧院（vihāra）を作って修行に専念していた。その頃、この僧院制度に匹敵するものがインド以外にあったらうか。恐らくなかったに違いない。だとすれば、西方の僧院制度がインドのその影響によって始まった可能性は十分考えられるのではないだろうか。

#### ▲モナステリオン

《フィロン》(c. 30BC-c. 45AD) (エウセビオスの引用によるフィロンの言葉)

さらに、彼(フィロン, Philōn)はわたしたちの中の禁欲主義者(アスケータイ)たちの生活をきわめて正確に語っているが、そのことは彼が、彼の時代の使徒的な人間——彼らは明らかにヘブル人であり、それゆえに大半の古い慣習をいささかユダヤ的な仕方でなおも守っていた——を知っていたばかりか、彼らを受け入れ、敬意を払い、認めていたことを明らかにする。彼は『観想的生活』(別題『〔神への〕祈願者について』)と題する著作の冒頭で、自分がこれから語ることに、真実以外のものを加えたり、創作したりすることは決してしないと約束する。ついで彼は、彼らや彼らとともに〔暮らして〕いる女たちがそれぞれ、テラペウタイ、テラペウトリデースと呼ばれていることや、その呼び名の由来を語る。そのように呼ばれたのは、彼らが自分たちのところにやって来る者の魂を、医師のように、悪の情熱から自由にし〔それを〕治療(テラペウエイン)したためか、あるいは、神的なものへの彼らの純粹で誠実な奉仕や礼拝のためであった。フィロン自身が彼らの〔生活〕態度に合致した名によって彼らをこのように呼んだとか、キリスト教徒という呼び名がまだそれほど一般的でなかったので、彼らは実際ははじめからそのように呼ばれていたのである、といった議論は今ここで詮索する必要はない。いずれにしても、彼は、彼らの財産放棄について、とくに次のように証言している。

「彼らは、哲学〔的生活〕をはじめると、その所有物を近親者に譲る。そして彼らは、すべての生活の気苦勞に別れをつけ、城壁の外に赴き砂漠やオアシスで生活する。それは彼らが、他の生き方をする者との交わりが有害無益であることをよく知っていたからである。」(中略) フィロンはさらに続ける。

「この集団は人の住む世界の多くの土地に見出される。なぜならば、ギリシア〔の土地〕と非ギリシア(バルバロス)〔の土地〕が完全な善を共有するのは正しいことだったからである。しかし、〔この集団は〕エジプトの各州、なかでもアレクサンドレイアの周辺に多い。各地から〔やって来た〕もっとも善良なる人びとは、その目的によく適った土地をテラペウタイの生地と見なしてそこに居住地区をつくる。この土地はマレイア(マレオティス)湖の上方の低地で、安全と温暖な気候のために最適地である。」

ついで彼は、彼らの住まいの特徴を述べた後、その地方の教会について次のように語る。

「どの家にもセムネイオンまたはモナスターリオンと呼ばれる聖なる場所がある。彼らはそこに単独でもって聖化された生の秘儀を執り行う。彼らはその中に、飲み物や食べ物はもちろんのこと、身体に必要な他のすべてのものも持ち込まない。〔彼らが持ち込むのは〕律法〔の巻物〕と、預言者を介して啓示された託宣、讃歌、そして、知識と敬神の念を増大させ完全にさせるその他〔の文書だけ〕である。」

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, 山本書店, 1986, pp. 105-107)

#### 4 初期ローマ帝国とインドの交流

##### ▲プトレマイオス時代

## 《ストラボン》

キュジコス（トルコ西北部）のエウドクソスはデメテルの娘（ペルセポネ）の祭礼に際して休戦の使者としてエジプトに赴いた。そのころ一人のインド人がアラビア湾の警備兵によってプトレマイオス（3世）善行者（288-221）のもとに連れてこられた。このインド人は船に乗ってインドを出発したが、船は海に迷い、仲間は餓死し、かれだけが半死半生の状態で海岸に漂着した。かれはこれらのいきさつをギリシア語を覚えてからひとに語った。そして助けられた礼にインドへの航海の案内役を申し出た。王は申し出に応じ、エウドクソスがそのインド行きに加わった。

エウドクソスはインドへ贈物をもっていき、エジプトへ香料や貴石をもって戻った。しかし、かれが持ち帰ったものはすべて王に取り上げられた。

王を継いだ王妃クレオパトラ（2世）がまたエウドクソスにインド行きを命じた。帰航に際し、船は風に流され、エティオピアの先へ漂着した。土民に酒や干しいちじくを提供し、水ももらい、現地語をいくつか書きとめた。そこで見た難破船のへさきに馬が刻まれていたので聞くと、西まわりで来た船のものだということで、そのへさきをもってエジプトに戻った。クレオパトラはすでに世を去り、その息子が王になっていたが、この王にも荷物をすべて取り上げられた。

エウドクソスは市場でへさきを船主たちに見せ、それがスペインのガデイラの人たちのものであることを知った。かれらの船は（アフリカ大陸の西部の）マウルシアに沿って南下するが、その船の1つがはるか先まで航行して、難破したことがわかった。

エウドクソスは（エジプト経由を避けようと？）西からリュビア（アフリカ大陸）まわりでインドへ行くことを考えた。船は座礁したが、岸にあがって、新しい船を造り、航海を続けて、かつて書きとめておいたのと同じ言葉を話す住民のところへ着いた。エウドクソスはそこからマウルシアへ引き返した。

かれはスペインから4度目の航海に旅だった。

(Strabon, *Geographia*, 2-3-4)

※以上はポセイドニオス (c. 135-51) が述べたことで、ストラボン自身は事実性を疑っている。ウッドコックによると、エウドクソスは4度目の航海からは戻らなかった。

## ▲アウグストゥス（63BC-14AD, 皇帝在位27BC-14AD）時代

## (1) 《プロペルティウス》(54BC-)

インドさえ、アウグストゥスよ、汝の勝利（の鎖）に対して首をさしのべている。

(Propertius, 2,10,15, [André 33])

## (2) 《プロペルティウス》

神聖カエサル（アウグストゥスのこと）は豊かなインド人たちのもとに軍隊を（進めることを）考える。真珠を産する海を艦隊で波切らせて。

定方 晟

(Propertius, 3,4,1-2 (27-22 BC), [André 33])

(3) 《ホラティウス》(65-8 BC)

休むことを知らぬ商人の君は世界の果てのインド人のもとに走る。貧困から逃れようと、海を越え、岩を越え、炎を越えて。

(Horatius, *Epist.*, 1,1,45-46. [André 31])

(4) 《アウグストゥス》(63BC-14AD)

しばしばインドから王たちの使節が私のもとに送られてきた。これまでいかなるローマの指導者たちにも見られなかったことであった。

(Augustus, *Res gestae divi Augusti*, 31, 1, (14 AD), [André 41])

(5) 《スエトニウス》(120頃)

かれ(アウグストゥス)の徳と謙譲の評判が、われわれに名前しか知られぬインド人やスキュタイ人を刺激して、進んで使節を送らせ、かれの友情とローマ国民の友情を求めさせたのである。

(Suetonius, *Aug.*, 21, 6, [André 129])

(6) 《オロシウス》(5世紀前半)

カエサル(アウグストゥスのこと)がこちら側のスペインのタッラコネ市(Tarracone)にいたとき、インドとスキュティアの大使たちがかれに会いにやってきた。かれらは世界の端から端まで歩いたことになり、これより先には行けないという所までやってきたのであり、したがってカエサルにアレクサンドロス大王が得た光栄に等しい光栄をもたらしたのである。スペインとガリアの使節が平和条約を結ぼうとしてカエサルに会うために中東の(in medio Oriente)バビロニアに達したように、インド人は東から、スキュタイ人は北から、カエサルの愛顧を得るために自国の土産をたずさえて西洋の端までやってきたのである。

(Orosius, *Historiae adversus paganos*, 6, 21, 19-20 (417-418 AD), [André 259])

▲西暦1世紀以後

(1) 《エリュトラ海案内記》(1世紀中頃)

§41 バラケースの後にはじきにバリユガザの湾とアリーアケー地方の海岸となるが、後者はマンバノスの王国と全インドとの始まりである。この地方の中、スキュティアーに境を接する内地の部分はアペーリアーと呼ばれ、沿岸地方はスュラストゥレーネーと呼ばれる。この地方は麦や米や胡麻油や牛酪や綿やこれから出来るありふれたインド木綿を豊富に産する。また此処には極めてたくさんの牛の群と体軀すこぶる偉大で色の黒い人々がいる。この地方の首都はミンナガラで、此処からまた極めて多量の綿布がバリユガザに運び下ろされる。このあたり

には今もなおアレクサンドゥロスの遠征の跡が保存されており、即ち古い神殿や壘塁の基礎や大変大きな井戸がある。この地方の、即ちバルバリコンからアスタプラのところのバリユガザに面したいわゆるパピケー岬までの沿岸航海は三千スタディオンに上る。

§47 ところでバリユガザの背後には様々の内地の種族がいる。即ちアラトゥリオイやアラクーシオイやガンダライオイやブーケパロス・アレクサンドゥレイアーの位するプロクライス地方の種族である。そしてこれらの上手にはすこぶる好戦的なバクトクリアノイの種族がおり、自分たちの王を戴いている。そしてアレクサンドゥロスはこれらの方面から出発して、リムユリケーやインドの南部を顧みずにガンゲースまで進んで行った。それ以来今日までバリユガザでは古いドウラクメー貨幣が流通しているが、これにはアレクサンドゥロス以後に王位に即いたアポルドトスやメナンドゥロスの印がギリシア文字で刻印されている。

§49 この商業地には葡萄酒、それは主としてイタリアの、またラーオディキアーのやアラビアの、また銅や錫や鉛、珊瑚やクリュソリトン、本物の衣服と混紡のもの各種、種々の糸を織り混ぜた一ペーキウス幅の帯、ステュラックス、メリロートン、未精製のガラス石、サンダラケー、スティーマ、この地方の貨幣と有利に交換される金、銀デーナーリウス貨幣、高価でもなく量も少しばかりの香油が輸入される。王にはその頃には高価な銀器や音楽の心得のある少年や後宮のための美しい処女や優秀な葡萄酒や混ぜ物のない高価な衣服やすぐれた香油が運び込まれた。ところでこれらの場処からはナルドス、コストス、ブデルラ、象牙、縞瑪瑙と瑪瑙とリュキオンと様々の木綿と絹布とモロキノンと糸と長胡淑と〔他の〕商業地から運ばれた品々などが輸出される。エジプトからこの商業地に航海する人々はユーリオスの月、即ちエビーピーの頃に出航するのがよい時機である。

(村川堅太郎訳『エリュトラ海案内記』)

(2) 《フロルス》(トラヤヌス時代[98-117]の人)

シナ人や、太陽の真下に住むインド人もやってきた。長旅を無意味なものにしないように、宝石、真珠、それに象まで土産にもってやってきた。じっさいかれらは4年もかけてやってくるのである。かれらが別の風土からやってきたことはかれらの肌の色が示していた。

(Florus, 2,34,62, [André 129])

(3) 《ヒエロニムス》(340-419)

インドから、ペルシアから、エティオピアから、われわれは毎日、僧侶の群を迎えている。アルメニア人は矢筒を下に置き、フン族は賛美歌を学び、スキュティアの寒気は信仰の熱によってたぎる。

(Hieronymus, *Epist.*, 107, 2, (400 AD), [André 241])

(4) 《サンガム文学 *Pattṭāṭṭu*》(西暦1-3世紀)より

素晴らしい見事な船がいくつもヤヴァナ人のもとからやってくる。ケーララ人の大河チュッリ河の白波を蹴立てて、金をもってやってきて、胡椒を積んで帰っていく。繁栄を極めたこの

町ムチリが戦の大音響とともに攻略されたとき、……

(P. Meile: *Les Yavanas dans l'Inde Tamoule*, Mélanges Asiatiques, JA, 1940-1941, p. 90, [これは詩の一部であって, 原文は Tāyañ-Kaṇṇanār, Agam 149, vers 7-11])

※文中, ムチリとはケーララの町ムージリスのこと。「大河」を意味すタミル語「ペリヤル」は現にケーララ州の川の名として存在する。

(5) 《ソリヌス》(c. 250)

インド人の町でインダス河に最も近いものはキュロスが破壊したカピサ (Caphisa) である。セミラミスはエリュマントゥス河の沿岸にアラコシアを築いた。コーカサスの近くではアレクサンドロス大王によってカドルシウム (Cadrusium) の砦が築かれた。アレクサンドリアも彼によって築かれ, これは30スタディアある。町はほかにもあるが, 重要なものは以上である。

(Solinus, *Collectanea rerum memorabilium*, 54, 2-3, [André 161])

(6) 《ソリヌス》

ここでエジプトのアレクサンドリアからインドへどのようにして行くかが述べられなければならない。ナイル川を利用し, エテシアン(夏, 地中海東部に吹く北風)に乗ってコプトスまで行く。その後, 陸路, ヒュドレウムへ行く。そこから幾つかの休憩地を経て紅海に臨む港ベレニケに着く。そこからアラビアの港オケリスに着く。最も近いインドの集荷地ズミリス (Zmiris) がこれに続く。ここは海賊が多いことで知られている。それから港づたいにコットナレ (Cottonare) に着く。ここへは丸木舟で胡椒が運ばれてくる。インドへ出発する船は夏の盛り, 犬座が昇る前かその直後に錨をあげる。帰国は12月になる。Vulturnus (東南東の風) がインドから帰るのによい風である。紅海に着いてからは Africus (西南の風) か Auster (南風) が運んでくれる。

(Solinus, *Collectanea rerum memorabilium*, 54, 7-10, [André 163])

(7) 《フラヴィウス・ヴォピスキス》(?)

[皇帝アウレリアヌスがパルミラでの勝利から連れ帰った捕虜の名。] ……アラブ人, インド人, バクトリア人, サラセン人, ペルシア人, ……

(Flavius Vopiscus, *Divus Aurelianus*, 33, 4, [André 203])

※アウレリアヌス (270-75) はパルミラの女王ゼノビアを捕らえた (272)。太陽神崇拝にもとづいて皇帝礼拝を整えた。

(8) 《フラヴィウス・ヴォピスキス》

かれ (エジプト人の篡奪者フィルムス, 273死) はしばしばインドへ商船を送った。

(Flavius Vopiscus, *Quadrige tyrannorum*, 3, 3-4, [André 203])



## 5 使徒のインド伝道

## ▲トマス（1世紀）

## (1) 《ルフィヌス・アキレウス》（4世紀末）

使徒たちが神の言葉を広めるために誰がどの地方へ行くかを決めようと籤を引いたとき、パルティアはトマスに当たり、エチオピアはマタイに当たり、こちら側のインド（India citerior, すなわちエチオピア）はバルトロメオの担当区になった。……

(Rufinus Aquileus, *Historia ecclesiastica*, 1,9, [André 235])

## (2) 《トマス物語》(?)

そのころ、わたしども使徒は皆エルサレムにいた。それは、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモン、ヤコブの子ユダである。そして、わたしどもは、全世界の諸地域を分割し、わたしどもひとりひとりが、各自にくじで当たった地域と、主が各自を遣わされた国民のもとに行くことにした。さて、くじびきの結果、インドが「双子」とも呼ばれるユダ・トマスに当たった。しかし、彼は出て行くことを欲しなかった。彼は、「身体が弱いので旅をすることができない」と言い、また、「ヘブル人であるわたしがどうしてインドに行き、インド人に真理を宣べ伝えることができようか」と言ったのである。ところが、彼がこのことを思いめぐらし、このことを言ったときに、救い主が夜彼に現われ、彼に言った。

「恐れるな、トマスよ。インドに行き、そこでみことばを宣べ伝えよ。わたしの恵みが汝とともにあるのだから」。

しかし、彼はそれに従わなかった。彼は言う、

「あなたが遣わそうと思われるところに、わたしを遣わしてください。しかし、ほかのところに！ わたしはインド人の所には行かないのですから」。

そして、彼がこのように言い、思案していたときに、たまたま、インドからやってきた名をアバネスというある商人がその地にいた。彼はグンダフォロス王から遣わされ、大工を購って王のもとに連れてくるようにという命令を王から受けていたのである。

さて主は、正午ごろ彼が町の広場を歩いているのを御覧になって、彼に言われた。

「大工を購いたいのですか」。

彼は主に言った、

「はい、そうです」。

すると、主が彼に言われた、

「わたしが大工の奴隷を持っています。そして、それを売りたいのです」。

主はこう言われて、彼にトマスを遠くから示され、刻印のない銀三リトラで彼ととりひきをされ、次のような文面の証（書）を書かれた。

定方 晟

「わたし、大工ヨセフの子イエスは、貴殿、インド人の王グンダフォロスの商人アバネスに、名をユダというわたしの奴隷を売ったことを誓約します」。

そして、証書を書き終わると、救い主はトマスとも呼ばれるユダを商人アバネスのもとに連れてきた。

(荒井献訳, 聖書外典偽典7・新約外典II, 教文館, 1976, pp. 229-231)

### (3) 《グレゴリウス・トゥロネンシス》(538-594)

使徒トマスはその受難記によればインドで殉教した。かれの聖なる遺体はだいぶ時を経てから、シリア人がエデッサと呼ぶ町に移され、そこに埋葬された。初め遺体が安置されていたインドの場所には僧院があり、壮大な規模の、細かく装飾の施された寺院がある。

(Gregorius Turonensis, *In Gloria Martyrum*, 31, [André 317])

## ▲パンタエヌス (2世紀)

### 《ヒエロニムス》(340-419)

ストア派の哲学者パンタエヌスはその優れた学識の名声のゆえに、アレクサンドリアの司教デーメートリウスによってインドに派遣され、その国のブラグマンや哲学者にキリスト教を布教するよう命じられた。

(Hieronymus, *Epist.*, 70, 4, (397-398 AD), [André 241])

## ▲メトロドロス, メロピウス (4世紀)

### 《ルフィヌス・アキレウス》(4世紀末)

コンスタンティヌス帝のときに向こう側のインド (India ulterior) にも福音が伝えられた。すなわち哲学者メトロドロス (Metrodorus) が、ついでテュロスのメロピウス (Meropius) がインドへ赴いた。(要約)

(Rufinus Aquileus, *Historia ecclesiastica*, 1, 9, [André 235])

## 6 シモン・マゴス (1世紀) とその弟子

### (1) 《クリスティ=マレイ》, 現代

グノーシス主義はキリスト教より早く始まったが、初期のキリスト教と関係があった。ドシテオスはバプテスマのヨハネの弟子と言われ、したがってイエスの同時代人だが、グノーシス主義者だった。かれはシモン・マゴスに影響を与えた。

(D. クリスティ=マレイ著, 野村美紀子訳『異端の歴史』, 教文館, 1997, p. 39. [原著, David Christie-Murray, *A History of Heresy*, 1976])

## (2) 《使徒言行録》

ところで、この町に以前からシモンという人がいて、魔術を使ってサマリアの人々を驚かせ、偉大な人物と自称していた。それで、小さな者から大きな者に至るまで皆、「この人こそ偉大なものといわれる神の力だ」と言って注目していた。人々が彼に注目したのは、長い間その魔術に心を奪われていたからである。しかし、フィリポが神の国とイエス・キリストの名について福音を告げ知らせるのを人々は信じ、男も女も洗礼を受けた。シモン自身も信じて洗礼を受け、いつもフィリポにつき従い、すばらしいしるしと奇跡が行われるのを見て驚いていた。

エルサレムにいた使徒たちは、サマリアの人々が神の言葉を受け入れたと聞き、ペトロとヨハネをそこへ行かせた。二人はサマリアに下って行き、聖霊を受けるようにとその人々のために祈った。人々は主イエスの名によって洗礼を受けていただけで、聖霊はまだだれの上にも降っていなかったからである。ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手を置くことで、“霊”が与えられるのを見、金を持って来て、言った。「わたしが手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、わたしにもその力を授けてください。」すると、ペトロは言った。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。お前はこのことに何のかかわりもなければ、権利もない。お前の心が神の前に正しくないからだ。この悪事を悔い改め、主に祈れ。そのような心の思いでも、赦していただけるかもしれないからだ。お前は腹黒い者であり、悪の縄目に縛られていることが、わたしには分かっている。」シモンは答えた。「おっしゃったことが何一つわたしの身に起こらないように、主に祈ってください。」

このように、ペトロとヨハネは、主の言葉を力強く証しして語った後、サマリアの多くの村で福音を告げ知らせ、エルサレムに帰って行った。

(新共同訳聖書「使徒言行録」, 8:9-25)

## (3) 《ユスティノス》(161殉教)(エウセビオスの引用による)

主が天に上げられた後、悪霊どもが神々を僭称する者たちを〔世に〕送り込んだ。彼らはあなたがたに追われなかったばかりか、さまざまな名誉に値するとさえ見なされた。サマリア人で、ギットンという村の出身のシモンという男がいた。彼は、クラウディオス・カイサルの時代に、〔自分に〕乗り移った悪霊どもの秘技を介し、あなたがたの帝都ローマで魔術を行なって神と見なされ、ティベル川にかかる二つの橋の間に像を建てられ、あなたがたの間では神としてたてまつられた。その像には、ラテン語で SIMONI DEO SANCTO すなわち、聖なる神シモンに、と刻まれている。そして、殆どすべてのサマリア人と他の民族の中の若干の者は、彼を第一の神と告白して拝している。彼と一緒に諸所を巡り、かつてフォイニケー(フェニキヤ)のテュロスで公娼だったヘレネーとかいう女は、この男から〔流出した〕第一のエンノイア(想念)である、と彼らは言っている。」

(ユスティノス『第一弁証論』1:26)(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, 山本書店, 1986, pp. 99-100. 訳文中の若干の固有名詞を一般に通用しているものに変えた。)

(4) 《クリフトン》, 現代

(『トマス福音書』114で) シモン・ペテロは言う、「マリアをわれらのもとから追いだしましょう。女は救いに値しないのですから」。しかしイエスは次のように答えた。「私は彼女が男となり、おまえたち男と同じ生ける霊( pneuma )になるよう彼女を導くであろう。自分を男にする女はみな天国に入るであろうから」。のちに加筆されたと思われるこの一節は象徴的に解釈する必要がある。エレヌ・ペイゲルスが『グノーシス書福音書』〔The Gnostic Gospels〕で述べているように、「女」とは「人間」のことであり、また「男」とは「神」のことであると思われる。言いかえれば、弟子たちは自分の人間性を克服しなければならないのであり、女性にとってそれは、別の文書で「女のなせる業」——つまり性行為と生殖——と呼ばれているものを避けることをおそらくは意味する。

(C・S・クリフトン著, 田中雅志訳『異端事典』, 三交社, 1998, p. 220)

(5) 《クリフトン》, 現代

エピファニオスによれば、彼が同じく非難するカルポクラテスの信奉者たちのように、シモン派もまた性の秘蹟を執り行ったという。「ありのままの様子などとても語ることできぬ破廉恥な儀式, 肉体の排泄物による儀式。男性の場合は放出物〔精液〕が, 女性の場合は経血がこの儀式のために集められた。何という恥ずべき行ないであろうか。シモン(・マグス)はこれを生命と知識と完成の儀式と称したのである」。

(同上, p. 113)

(6) 《クリフトン》, 現代

エイレナイオスによれば、シモンはフェニキアの都テュロスの娼家で見つけたヘレネーという名の女性を連れていたという。またシモンの宇宙論は本質的にグノーシス主義的であり、一部プラトン哲学の気味を帯びていたという。この宇宙論では、神(「一者」)はその第一の流出として「思考」(エンノイア)を生み出し、この「思考」から純粋な霊的世界と物質世界とを橋渡しする諸天使が生じたとする。しかし一部の天使たちと諸権力が「思考」に夢中となり、彼女(「思考」)を人間の肉体のなかに閉じ込めてしまった。この幽閉はいくつもの受肉をつうじて繰り返され、トロイ戦争の原因となったヘレネーもその受肉の一つとされる。そのためシモンは誤れる神から彼女を救うために受肉した。こうしてシモンの信奉者たちもこの世を支配する霊的権力から自由となり、真の、ただし遠方にある神とふたたび結ばれることができるとされる。

(同上, p. 112)

(7) 《クリフトン》

この伝承(使徒行伝)によれば、ペテロとシモンがローマで衝突したという。シモンは自分の力で「空を飛ぶ」ことができると宣言した。そして空中へと浮かんだが、ペテロの祈りによって墜落した。

(同上, p. 110)

## 7 シモン以後の異端者 (1世紀-2世紀前半)

### ▲グノーシス主義

#### 《クリスティ=マレイ》, 現代

グノーシス主義はシモン・マゴスからサトゥルニヌスへと継承されたが、新約聖書には別の二つの系列についての記述がある。コリントの教会で内紛をまわっている、とパウロが書いているアポロ(コリントの信徒への手紙一の初めの部分を見よ)は、キリストはグノーシス主義の体系で重視される知恵(ソフィア)だと教えてらしい。知恵はこの世に来たが、この世の支配者たちによって無視された、というのである。コリントの信徒への手紙一を読んだ人びとの中には、アポロがキリスト教をグノーシスの一つとして扱うことをパウロが責めた、という解釈があった。ヨハネの黙示録(2:6-15)に、神に憎まれると記されているニコライ派は、100年後に教父たちが非難することになる宗派とは別のものだろう。もし同じ宗派であるなら、これらの異端説とはグノーシス主義に共通の、旧約聖書の創造神の断罪である。アジアのメシア主義的なユダヤ人キリスト教徒グループの中に広がっていたグノーシス主義は、紀元70年のエルサレム陥落から大きい刺激を受けた。

「キリスト教」グノーシス主義の思想を初めて明確に述べたのはケリントスだといわれる。ケリントスは、割礼と安息日に固執するユダヤ人キリスト教徒を軽蔑して、世界を創造したのは神ではなく、神から遠く離れたある力だ、と教えた。イエスはヨセフとマリアの子だった。「キリスト」はイエスが洗礼を受けたときに鳩の形を取ってイエスに降ったが、十字架につけられる前にかれを見捨て、人間イエスを苦しむにまかせた。メシアが千年の間平和に支配する至福千年期をケリントスは待ち望んだ。

ケリントスの弟子の一人カルポクラテスはアレクサンドリアで教えた。かれは師とは少し違って、世界は天使たちが創造したと説教した。キリスト論はケリントスとほぼ同じだが、信者ほ同じ力にあずかることによってキリストに等しいものになる、と言ったところだけが異なっていた。信者はこの力で武装しているので、世界創造者であるアルコーンを軽蔑し、イエスと同じ奇蹟を行なうことができる。カルポクラテスはケリントスの千年至福の夢想を承認しなかった。かれの考えでは、人間はアルコーンから解放されるためにはその前にまずアルコーンが統轄する悪徳の奴隷にならなくてはならない。それまでは何度でも生まれ変わってかれらへの負債を返さねばならない。この反道徳的な態度はユダヤ教の神と律法への、グノーシス主義の反抗から生じたらしい。これが天使軽侮および激しい世界拒否と結びついて、典型的なグノーシス主義の原理に従うことになる。

(D.クリスティ=マレイ著, 野村美紀子訳『異端の歴史』, 教文館, 1997, pp. 41-42)

### ▲メナンドロス (1世紀後半)

《ユスティノス》(エウセビオスの引用による)

しかし、われわれは、カパラッタイア村出身のサマリヤ人だったメナンドロスとかいう人物がシモンの弟子になったことや、彼も悪霊につき動かされてアンティオケイアに現われ、魔術で多くの人びとをたぶらかしたことを知っている。彼は、自分にしたがう者は不死の身になると説いた。現在でも、彼〔の教え〕にしたがって、このことを告白する者たちがいる。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, 山本書店, 1986, p. 177)

▲サトルニヌス, Saturninus (2世紀前半)

(1) 《岩波西洋人名辞典》, 現代

シリアの哲学者、神学者。2世紀の前半、ハドリアヌス帝時代のアンティオキアの人。自ら使徒ペテロの友グラウキアスに教えられたと語った。バシレイデス、ヴァレンティヌスと並んでシリア派キリスト教グノーシス異端の代表者。後にエンクラト派異端を開いたタティアヌスは彼の弟子であった。

(2) 《エウセビオス》(c. 263-339)

こうして、シモンの後継者としてその名をあげたメナンドロスからは、二つの口をもつ双頭の蛇のような力が現われ出て、二つの異端の開祖であるアンティオキヤ人のサトルニヌスとアレクサンドリヤ人のバシレイデスを興した。そして、神を憎む異端の学校を、前者はシリアに、後者はエジプトに創設した。エイレナイオス(イレナイウス)が暴露するところによれば、サトルニヌスの教説の大部分はメナンドロスと同じく虚偽であり、バシレイデスは秘守を口実に教説を無限に拡大し、己れの不信仰な異端のために奇々怪々なおとぎ話をでっち上げた。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』2, 山本書店, 1987, p. 15)

▲バシレイデス, Basileidēs (2世紀前半)

(1) 《岩波西洋人名辞典》

140頃死。アレクサンドリアの神学者。グノーシス派に属した。シリアに生まれたらしいが、生涯はほとんど知られていない。アレクサンドレイアで教師をし(130頃)、《福音書註解 Exegetica, 24巻》を書いたが、今日はその抜粋しか残っていない。

(2) 《エウセビオス》

その頃、多くの教会人は真理のために抗争し、使徒たちや教会の栄光のために弁舌によって戦っていたが、中には、後の人たちのために、著作によってこれらの異端にたいする警戒の道を備える者もいた。その著作の一つで、わたしたちに伝わるバシレイデスへのもっとも有力な反論は、当時もっとも著名な作家だったアグリッパス・カストロスのもので、彼はこの男の恐ろしいかさまぶりを白日のもとに曝している。彼はこの男の秘密〔の教説〕を暴露して次

のように述べている。すなわち、バシレイデスは、福音書〔の註解〕を二十四冊著わし、自分のお抱え預言者としてバル・カバスとバル・コーフを任命し、そのほかにも実在しない人物を自分のためにつくり上げ、それに野蛮な名前を付けてそのようなことに騙されやすい人たちを驚かせた、と。バシレイデスはまた、偶像への捧げ物を食べても、迫害のときにはあっさり信仰を否認してもかまわないと教え、そして、ピュタゴラスのように、自分の所へやって来る人びとに五年間の沈黙を命じた、と。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』2, p. 16)

#### ▲ケリントス, Kērinthos (1-2世紀)

##### (1) 《岩波西洋人名辞典》

1-2世紀のユダヤ人キリスト教徒。キリスト教と混合主義的ユダヤ教とを同一視するグノーシス派で〈ケリントス派〉を創始した。イエス・キリストは公正賢明な人間にすぎぬと主張し、その救世死を無意味とした。イレネウスによれば、ヨハネはケリントス反駁のために彼の福音書を書いたという。

##### (2) 《ガイオス》(エウセビオスの引用による)

そればかりでなく、ケリントスは、偉大な使徒の作と称した『黙示録』を利用し、天使たちから自分に示されたと偽り、奇蹟物語をわたしたちに紹介した。彼は、復活後、キリストの王国が地上に現われ、エルサレムに住む肉は再び情欲と快楽の奴隷になるだろう、と言っている。彼は神の〔聖なる〕文書の敵だったので、〔また、人びとを〕欺きたかったので、結婚の宴が1000年続くと言った。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, p. 179, ガイオス著『探究』)

##### (3) 《ディオニュシオス》(エウセビオスの引用による)

一方、その名に因みケリントス派と呼ばれるものを創始したケリントスは、自分のでっちあげたものに、名誉ある名をつけようと望んだ。彼の教えた教義は、キリストの王国が地上に現われるというものだった。彼は現世的生活を好み、骨の髄まで肉欲主義者だったので、それが欲望と胃袋の満足によって、すなわち飲食や同衾、あるいは、もっと穏やかな形で供されられるとされる饗宴や犠牲、犠牲獣の屠殺などによって実現されると夢見ていた。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, p. 180, デイオニュシオス著『約束』)

※ディオニュシオス (Dionysios, c. 190-265) はアレクサンドレイアの教会管区の監督。

##### (4) 《エイレナイオス》(エウセビオスの引用による)

あるとき、使徒のヨハネが〔体を〕洗うために浴場に入った。しかし彼は、ケリントスがそこにいるのを知ると、そこから飛び出し、戸口に逃げた。彼はケリントスと同じ屋根の下にいることさえ耐えられなかったので、ケリントスと一緒にいる者たちに、『さあ、逃げよう。浴

定方 晟

場が崩れ落ちるぞ。真理の敵ケリントスが中にいるからだ!』と言って、逃げるようにすすめた。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』1, p. 180, エイレナイオス著『異端駁論』)

(5) 《ディオニュシオス》(エウセビオスの引用による)

実際、わたしたちより前の時代の一部の人たちはこの小冊子(『ヨハネの黙示録』)を斥け、徹底的に攻撃しました。彼らは〔それを〕一章毎に検討し、〔それが〕わけのわからぬ非論理構なもので、その表題も虚偽であると断定しました。彼らは次のように申し立てます。すなわち、それはヨハネのものではなく、またアポカリュプシス(黙示録=帳をはずすこと)でもない、なぜならば、それは了解不能という重いふ厚い帳で隠されているからである。この文書の著者は使徒たちの一人でないのはもちろんのこと、聖徒たちや教会に属する者の一人でさえない。それはその名に因んでケリントス派と呼ばれるものを創始したケリントスである。彼は自分のでっち上げたものに、名誉ある名をつけようと望んだ。彼の教えた教義は、キリストの王国が地上に現われるというものだった。彼は現世的生活を好み、骨の髄まで肉欲主義者だったので、欲望を胃袋の満足によって、すなわち飲食や同衾、あるいは、もっと穏やかな形で供されると思われる饗宴や犠牲、生け贄の斬殺などによって実現されると夢見ていた、と。

しかし、わたしは多くの兄弟がこの小冊子を尊重しているので、それを斥けるような大胆なことはしません。ただし、わたしは自分の理解力の乏しさのために、云々。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』3, 山本書店, 1988, p. 49, デイオニウシオス著『約束』)

▲カルポクラテス, Karpokratēs (2世紀前半)

(1) 《岩波西洋人名辞典》

2世紀前半のアレクサンドリアのグノーシス派の学者。プラトンの影響を受け、人間の靈魂は、地上に生を受ける前に神のうちに存在していたから、靈魂が罪を遠離して純粹になるに従い、かつて神のうちに見たものをますます鮮やかに回想すると説いた。

(2) 《エイレナイオス》(エウセビオスの引用による)

またエイレナイオスの文書によれば、カルポクラテスはこの者たちと同時代人で、グノースティコイと呼ばれる別の異端の父である。彼ら〔グノースティコイ〕は、シモーンの魔術をバシレイデスのように秘密裡にではなく公然と伝えようと考え、自分たちの行う魔術的な業や、媚薬、夢をもたらすもの、介添えのダイモン(悪霊)、およびそれ以外の似たりよったりの演出物について、それがさも重要であるかのように仰々しく語る。そして彼らは、それらを用いて次のように教える。すなわち、彼らの密儀に——いやこの猥褻な儀式に〔と言った方が適切だが〕——与ろうとする者は、猥雑なことをすべてしなければならぬ、なぜならば、秘儀を介して所定のすべて〔の手續き〕を踏まなければ、「世界の支配者たち」——彼らの言葉を



使えば——から決して逃れることができない、と。この悪を喜ぶダイモーンは、それらの執事たちを利用し、彼らに欺された哀れな人びとを破滅に追いやり、信仰のない異教徒に神の御言への大きな不信の念をもたらした。なぜならば、彼らに端を発した噂が、キリスト教徒の全民族への中傷として広まったからである。そして、とくにこのような仕方で、わたしたちに関する冒瀆的で邪悪な臆測が、当時の信仰のない者たちの間に広まった。それは、わたしたち〔キリスト教徒〕が母親や姉妹と禁じられた交わりをもち、穢れた食物を口にしているというものだった。

しかし、カルポクラテスの活動も長くは続かなかった。真理が自らを明らかにし、ときが進むにしたがってその光がますます明るく輝いたからである。実際、敵どもの陰謀は真理の働きによって論駁され、たちまち消し去られたのである。もちろん、異端は次々と新しく生まれたが、古いものはさまざまに分裂を繰り返し、それぞれの時期にそれぞれの仕方で滅んだ。

(秦剛平訳『エウセビオス教会史』2, pp. 16-18, エイレナイオス著『異端駁論』)